

講演 皇女の婚姻から見た『源氏物語』

浅尾 広良

一、はじめに

二、『源氏物語』における皇女の婚姻

三、史上における皇女の婚姻(1)

——平安以前——

四、史上における皇女の婚姻(2)

——平安初期から一条朝前後まで——

五、物語への視界——おわりにかえて

『源氏物語』桐壺巻の巻末近くには、二人の皇女の婚姻が語られている。しかも二人は皇統の尊貴性を担う后腹内親王であり、物語はこうした皇女の婚姻を全体の舞台設定として語るのである。そもそも、律令制度下において皇女の婚姻は厳しく制限されていた。それは皇女が皇位継承において重要な役割を果たして来たことに由来する。そのために皇女不婚の原則は何百年にも亘って守られてきたが、平安時代に入るとそれが少しずつ崩れてくる。しかし、そうであっても天皇の意図に従い、皇女は相変わらず天皇家の権威保持にとって重要な役割を果たしたのである。歴史的に見ると、皇統が交替し、天皇の権威が危うくなった時に、皇女を使った皇統の権威化と臣下との紐帯強化が繰り返し行われてきた。物語の二人の皇女の婚姻は、天皇のおかれた裏面の事情を想像させる。

一、はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました大阪大谷大学の浅尾と申します。よろしくお願いいたします。上野先生から話をし
てほしいというご依頼がありましてお引き受けしたのです
が、何をお話していいか迷ってしまいました。やはり、今
自分が気になっていることを正面からお話するのが一番良
いのではないかと思い、皇女の婚姻という問題を今日は取
り上げてお話してみたいと思います。多分ここにいらつし
やる方々の中で、皇女の婚姻などという問題に興味ある方
が一体何人ぐらいいらつしゃるか、正直分かりません。も
しかしたら私一人かもしれません。でも、実はこのテーマ
は、いろんな問題に派生する可能性を持っています。例え
ば、先ほどの田中先生が話された『落窪物語』について、
主人公の女君がなぜ「わかんどほり」の出であるという設
定にする必要があるのかなども、切り込んでいけるきつ
かけになるのではないかと思っています。

まず最初に、今日の方向性を「序」の部分に書いておき
ました。『源氏物語』における皇女の婚姻は、主に第二部
の女三宮の処遇を中心に論じられ、父朱雀院の判断の妥当
性が問題となってきました。しかし、物語内の皇女の婚姻
は女三宮だけに留まりません。歴史の中で繰り返されてき

た皇女の婚姻の分析を通して、『源氏物語』に語られる皇
女の婚姻がどのように読める可能性があるのか、またそこ
にどのような意味があるのかを考えてみたい。要は、皇女
の婚姻から何が見えてくるのかということです。

二、『源氏物語』における皇女の婚姻

問題となった『源氏物語』若菜上巻に何が語られていた
かを簡単におはなしすると、最初に、光源氏の兄である朱
雀院が、藤裏葉の巻の六条院行幸以来病気がちで、出家を
決意するということから始まります。出家すると子ども
も達が残されてしまい、その御子たちは春宮を除くと四人
の皇女がいて、その中で母のいない女三宮が心配だとい
うのです。女三宮の母は、先帝の更衣腹の皇女で源氏なの
です。朱雀帝がまだ春宮だったところに参内したのですが、立
后されないまま朱雀帝が退位してしまったので、失意のま
まに亡くなってしまいました。なので、女三宮には身寄り
が誰もいません。朱雀院はこのほかこの女三宮を寵愛し、
自分が出家した後のことを心配して、誰か後見になってく
れる人はいないかと思案するんですね。そこで婿選びが始
まり、朱雀院の弟である兵部卿宮や、自分に仕えている別
当大納言、それから柏木衛門督などの婿候補が幾人か俎上
に上るものの、結局巡りめぐって自分の弟の光源氏に預け

ることになるという話です。

この女三宮の処遇をめぐるのは、何人もの人が論じてきました。その最初が今井源衛さんの「女三宮の降嫁」という論文です。これが出たのは『文学』という雑誌の昭和30年6月号です。源氏物語を研究をしている人たちにとっては割と有名な話なんですが、この論文が出た後、これに対して石田穰二さんという方が反論しまして、ちょっとした論争になりました。そのきっかけを作った論文です。そこでどんなことが指摘されたかを見ていきます。今井さんは、「継嗣令では天皇妃は内親王に限り、また内親王以下四世王女までは臣下に降嫁し得ないというきびしい規定がある。（中略）もともとこの令の規定が、天皇絶対性を核心とした律令制度維持のための、著しく非人間的なものであることはいうまでもない」と述べ、皇女不婚の原則が「継嗣令」の中にあることを指摘し、それはきわめて非人間的だと解釈するわけです。そして、「皇族同志の血族結婚を前提としたこの規定は、藤原摂関体制の進展に伴う天皇自身の弱体化から、天皇が外戚の経済的支援を唯一の頼りとする状態になっては、もはや現実的基盤を失ってしまったといわねばならない。天皇の側からすれば皇女を妃としても、一向有難いことはない」と、皇女の入内を一刀両断に切るわけです。さらに、律令の規定なども現実的な基盤を失

ってしまったのだと言い切り、十世紀中葉——九百年代の半ばあたりには、「既に皇女の入内・立后が希有なことと考えられていた証拠であろう。皇女の結婚はいよいよ困難となり、人間的解決を計るかぎり、令制は崩れざるを得ない」のだと。「英明だといわれた醍醐天皇が、旧慣に背いて、その皇女を六人までも臣族に降嫁させているのは、たしかに時運を察する眼力があつたことを物語る」のだとし、皇女を六人も降嫁させた醍醐天皇には先見の明があつたと述べています。そして、「皇族自身の主観的矜持も理解しながら、それをやはり非人間的な時代錯誤と考えざるを得ないような時代感情が、作者にこうした文をなさしめたのであらう」とし、皇女不婚など非人間的で時代錯誤という歴史認識を述べています。そして同じように考える朱雀院も時代錯誤的な人間で、さんざん迷って光源氏に降嫁させたことに関して、「院はここで明らかに錯誤の人として描かれたのだ。（中略）院は負け馬であり（中略）こうしたひ弱な人間として院を描いていることは、見逃してはならないだろう」と位置づけました。

この後に他の人が同じテーマで論文を書く過程で、実は今井源衛さんの物言いにあちこち間違いがあることが分かってきました。後藤祥子さんは、「皇女の結婚——落葉宮の場合」の中で、今井源衛さんと同じ史料を使って次のこ

とを指摘しました。一番目に、降嫁している皇女は、醍醐・村上を問わず、更衣腹が圧倒的に多いこと。二番目に、降嫁の相手は時の摂関家かその子弟でなければ、父帝に近い源氏かその一族であること。三番目に、摂関家やその子弟の場合、兼家や晩年の師輔のような例外もあるが、概して皇女との年齢差が小さいのに比べ、中流源氏の場合は開き大きい。簡単に言うと、年齢差が小さいのは褒賞の意味合いが強く、年齢差が大きい場合は後見的な意味合いが強いのだということ。四番目に、皇女は結婚しても概して寡産で、たまたま生まれても政変のおりを受けることが多いことです。そして、摂関家の子弟との婚姻例については、褒賞という以上に男側からの獲得という性格が色濃いことを指摘しました。ここが一番大事なところで、皇女の結婚を全部一緒に論じてはいけないということです。皇女が藤原氏の色好みの対象となつて、結果として結婚した例があり、その中には天皇が許していない場合があるということです。

その問題をさらに追究したのが、今井久代さんでした。今井さんは「皇女の結婚——女三の宮降嫁の呼びさますもの」の中で、皇女の結婚を天皇の許があつた正式な結婚か否かという問題に焦点を絞つたのです。そして、「皇統の危機にしばしば表面化するのだが、皇女の血は実際に皇

統の純血性・聖性に関わることもある」と指摘しました。加えて、「醍醐・村上朝に増加する皇女と藤氏との結婚は、おのが血筋を皇親と同じ地位にまで高めたい藤氏側の犯しであり、それを認めさせ得る藤氏の権勢の証、また皇権にとつては権威の低下や風紀の乱れを示しているのである」と分析し、醍醐天皇の皇女たちが六人も降嫁したのを風紀の乱れだと指摘しました。実は、醍醐天皇の皇女で藤氏に降嫁した例はどれ一つとして天皇裁可ではなかったからです。先の今井源衛さんは皇女を降嫁させた醍醐天皇を英明と位置づけましたが、天皇裁可かどうかという視点を導入することで、まったく逆の評価になつてしまうのです。さらに、「天皇が皇女を他氏に娶らせるのは、有能な後見との紐帯を強めたいごく特殊な場合に限られるのである」とも述べています。とすると、『源氏物語』の女三宮の場合、朱雀院の裁可による結婚ですから、準皇族の光源氏の力を借りようとしたことが読めてきます。今井源衛さんは、朱雀院の判断を錯誤だ、間違いだと述べていましたが、今井久代さんは同じ史料を使いながら、朱雀院の判断は極めて正当であると述べていて、全く違う結論が導かれているのです。このことは「研究をする」ということについて、とても重要な示唆に富んでいると思います。私は授業で院生諸君に常日頃「研究史を踏まえない」と言っているので

すが、それとともに「研究史を鵜呑みにしてはいけない」とも伝えていきます。鵜呑みにしてしまうと、その路線でしか論じられなくなるからです。ですから「研究史を踏まえながら、その人の言っている内容を必ず検証しなさい」と言っているのです。これなどその格好の例ですね。今井久代さんは、今井源衛さんが使った史料と全く同じものを使いながら、それを一つ一つ検証することを通して全く逆の結論に達しているのですから。

ところで、『源氏物語』における皇女の婚姻例は、女三宮だけに限ったことではありません。内親王の結婚例では、先帝后腹の藤壺が桐壺帝に入内した例や先帝更衣腹の藤壺が朱雀帝に入内した例、桐壺帝妹の大宮が左大臣に降嫁した例や朱雀帝更衣女二宮が柏木に降嫁した例、そして今上帝女御藤女二宮が薫に降嫁した例などがあります。また親王の娘（女王）も二世皇女で、その婚姻例も複数語られています。このように『源氏物語』には多くの皇女の婚姻が描かれています。内親王の婚姻のうち、父天皇の死後の婚姻は、先帝后腹藤壺が桐壺帝に入内する例と、同じく先帝更衣腹藤壺が朱雀帝に入内する例だけで、それ以外はいずれも父天皇の裁可で行われた婚姻です。このうち特に問題になると思われるのが、先帝后腹藤壺の桐壺帝への入内と桐壺帝妹の大宮が左大臣に降嫁した例です。なぜ問題にな

るのかとえば、二人とも后腹内親王の婚姻だからです。皇女は母の腹によつて后腹内親王、女御腹内親王、更衣腹内親王の三ランクに分かれます。このうち后腹内親王はとりわけ「血の尊貴性」を担った存在です。桐壺巻の藤壺登場の場面と大宮が紹介される場面を読んでみると、どちらも「后腹」であることが強調されるように語られていることが分かります。藤壺登場の場面では后という言葉が四回も出てきますし、大宮の方も「母宮、内裏のひとつ后腹になむ」と語られています。しかも、二人が后腹であることに關しては、青表紙本や河内本などのどの本文で読んでも異同はありません。そういう血の尊貴性を担う皇女の婚姻を物語の舞台設定とする意味は何なのか、桐壺巻は何を語ろうとしているのかが問題なのです。歴史的に皇女の婚姻がもつた意味を考察することから、この問題を考えてみたいと思います。

三、史上における皇女の婚姻（一）

——平安以前——

まず最初に六世紀ごろから平安以前までを見ていきます。このころの皇女の婚姻については既に先学の研究があります。ここでは河内祥輔さんの『古代政治史における天皇制の論理』に指摘のある内容を見ながら、皇女の入内の問題

を考えてみます。でも、この指摘も鵜呑みにしてはいけませんよ。言われていることを一つ一つ検証しながら足元を固めないといけません。河内さんは、六世紀以降の皇位継承の中から次のことを述べています。女性である推古を除き、仁賢・継体・安閑・宣化・欽明・敏達・用明等の諸天皇に共通して見られる特徴として、妻の一人に皇女がいること。天皇には二つの種類が見られ、一つが子孫に皇位を継承できる天皇であり、もう一つがその資格をもたない天皇で、その差は婚姻形態に関わること。直系系統がその独自性を最もよく表現しうる方法は、異母兄妹婚を継続的に繰り返す形態と考えられること。天皇は父系の血を近親婚によって濃密に伝えようとする志向性が窺えるが、父系で繋がらない場合は母系によって前代の血統を伝えようとする様相が見られるという点です。これらのことは結果としてではありませんが、系図によって確認できます。継体天皇の妻である手白香皇女は仁賢天皇の皇女で、その間に生まれたのが欽明天皇です。そして、その妻となった石姫皇女は、継体天皇の子の宣化天皇の皇女、すなわち継体の孫にあたります。さらに、欽明天皇と石姫皇女との間に生まれた敏達天皇は、異母兄妹の推古天皇と結婚しています。このように直系を作っているのは、父が天皇であるだけでなく、母も皇女である場合なのです。もう一つ重要な問題が、

雄略天皇から敏達天皇への皇統の流れです。雄略天皇と継体天皇とは父系において限りなく遠い存在です。ところが、雄略の娘の春日大姫皇女が仁賢天皇に入内し、その娘の手白香皇女と橘仲皇女がそれぞれ継体天皇と宣化天皇に入内して儲けたのが、欽明と石姫皇女で、この二人が結婚して敏達が生まれるというように、雄略の血は、父系では繋がらなかったものの、皇女の血を通して次代に引き継がれるのです。雄略から敏達への流れは、男系から女系へと変わり、再び男系に戻っています。天智天皇以降でみても、同じような志向性が見て取れます。天智の後を継いだのは弟の天武で、その天武の皇統を支えたのが兄天智天皇の皇女達です。すなわち、天武と結婚した持統天皇は天智天皇の皇女ですし、その間に生まれた草壁皇子と結婚したのも天智の皇女の元明天皇でした。そして、草壁と元明との間に生まれたのが文武天皇です。天智から文武に至る流れを支えたのは、天智の皇女たちで、従来と違うのはその皇女たちが女帝となっていることだけです。文武の子の聖武天皇の御代になって初めて、皇女ではなく藤原氏出身の光明子が立后され、その所生の子に直系の資格が認定されるあり方が出現すると河内さんは述べています。しかし、聖武の血は父系では繋がりませんでした。皇女の孝謙天皇が即位しましたが、このままでは途絶えてしまうため、孝謙とは

腹違いの皇女井上内親王が天智の血を引き継ぐ白壁王との間に他戸王を儲けていたことから、この子に皇位を引き継がせるためにその父である白壁王が光仁天皇として即位するわけです。だから、光仁の即位は便宜的な措置にすぎません。他戸こそが聖武の直系と見做されていたのであり、ここにも皇女によって皇位を補完し継承しようとする志向性が見られます。このように、天皇は基本的に父系の血統をより濃密に伝えようとし、それを補う役割を担ったのが皇女である母系の血なのです。六世紀から八世紀までの天皇に入内した皇女が皇位継承に果たした役割をまとめると次のようにまとめることができます。(1)皇女の入内は、皇位継承権を付与する意味をもつ。(2)生母が皇女である天皇が直系皇統となる資格をもつ。(3)父系で繋がらない場合に、前代の皇統の血は皇女を媒介として新しい皇統に流入するということです。

次に皇女の降嫁の例を見ていきます。皇女の婚姻に関しては、『継嗣令』第十三の中にはっきりと不婚の原則が書かれています。「凡そ王は親王を娶く。臣は五世王を娶くことを聴せ。唯し五世王は親王を娶くことを得ず」——王は親王の子および孫です。そういう人々は内親王と結婚できる。これは皇族内では結婚できるという意味です。しかし、臣下は五世王とだけは結婚を許すけれども、五世王は

親王つまり皇女と結婚できないと規定しています。『継嗣令』に定められた皇族の範囲は四世までなので、これは実質皇女と臣下との結婚を禁止しているのです。文武天皇の慶雲三年（七〇六）二月十六日に出された詔に「今より以降、五世之王を皇親之限に在らしむ」と皇族の範囲を拡大しているの、これより後は臣下は六世王以下の女性とできないと結婚できなくなります。しかし、実際のところはそれが破られる例がありました。今井弘道さんの指摘によると、藤原久須麻呂に嫁した加豆良女王の場合は、明らかに令条に違反する行為であるとしています。ではなぜこれが可能だったかというと、久須麻呂の父が正一位太政大臣藤原仲麻呂だったからで、自らとそ一族を皇親に擬する野望のもとに婚嫁が行われたと述べています。栗原弘さんも同様に皇女と臣下の婚姻例を分析し、皇女と臣下が結婚した例が非常に少なく、この規定はかなり厳密に守られていたと述べています。これらのことから、平安以前までで皇女の入内と降嫁の例を通覧すると、皇統の権威——言い換えれば血統の尊貴性の保持と強化のために皇女が大きな役割を果たしていた実態が浮かび上がってくるのです。皇統内での婚姻によって皇統を権威化し、さらに臣下への婚出を厳しく制限して権威の流出を防いでいたのです。

四、史上における皇女の婚姻(2)

——平安初期から一条朝前後まで——

さて、平安時代に入ると、状況は少しずつ変化してきます。ご存じのように平安時代は桓武天皇から始まります。桓武天皇は光仁天皇の皇子なのですが、母が高野新笠という朝鮮系の女性で身分が低かったために、桓武の権威もとても低かったのです。皇統においては血筋がとても重要ですから、母の身分が低いというのは致命的なのです。その桓武が天皇となつて行つた政策が次の三つです。一つ目が、藤原氏出身の藤原乙牟漏を皇后に立后しながら、皇子には腹違いの妹と結婚させたこと。二つ目が聖武の血を引く皇女を父の光仁を含め桓武・平城の三代に渡つて入内させたこと。三つ目が臣下と皇女の婚姻の規制を大幅に緩和したこと。一つ目から詳しく見ていきます。桓武は、藤原氏出身の女性を立后するのですが、皇子たちには腹違いの妹——即ち皇女と結婚させているのです。安殿親王(平城)には大宅内親王、神野親王(嵯峨)には高津内親王、そして大伴親王(淳和)には高志内親王を娶らせるという、六世紀型の結婚をさせています。すでに時代は九世紀になるころなのに、なぜこのようなことをしたかと言えば、先に述べた通り、皇女を娶ることが天皇としての権威化と関

わるからでしょう。皇女を娶ることによつて皇位継承権を与え、直系皇統を作るための足がかりとしたと考えられます。そして、二番目の政策もこのことと関わっていると思われます。光仁が聖武の皇女井上内親王と結婚し、光仁の子の桓武が井上内親王腹の酒人内親王と結婚し、また桓武の子の平城が酒人内親王腹の朝原内親王と結婚するのです。三代に渡つて聖武の血をひく皇女たちを妻に迎えているのは、聖武天皇の流れを皇女を通して取り込もうとしたのでしょう。このようにして前代の皇統との関係を結ぼうとしたのだと考えられます。そして、最後の三つ目の政策が、今までの皇統では考えられないことで、皇女の婚姻の規制を大幅に緩和しました。これは延暦十二年(七九三)九月十日に出された詔に残されています。趣旨は大臣家の子弟については三世以下の皇女を娶ることを許し、藤原氏については特に政治的功労が大きいゆえに二世王以下との結婚を許すということです。これまで何百年と厳しく規制してきた臣下と皇女の結婚を大幅に緩和した理由は何なのでしょう。例えば栗原弘さんはこれを桓武の出自と関連づけて、桓武が歴代の天皇が保持していた超越した血統的エリート意識が極めて低い人物で、より臣下に近い精神を持っていたから、格式や前例に拘らない行動様式をもつことができたと述べられています。しかし、多分、それは逆じゃない

かと思うのです。桓武が自分の皇子女たちに異母兄妹婚を実施したことと皇女の婚姻の大幅な規制緩和とは表裏一体のことではないでしょうか。桓武は母の身分が低いために天皇として著しく権威が低かったわけですから、出自には相当にコンプレックスをもっていたと思うのです。だからこそ、自分の皇子女たちには六世紀型の異母兄妹婚をさせて権威ある直系皇統を作るとともに、皇女の婚姻の規制緩和を行って、特定の臣下との紐帯を強めて強力な味方を作り、自分の皇統を支えさせたのではないのでしょうか。すべては権威ある直系皇統を作るための政策です。しかし、この政策はその後の天皇には引き継がれていきません。それは、しなかったというより、直系皇統が出来上がったためにその必要がなかったからでもあります。

ところが、これと同じことをやった天皇がしばらくしてまた現れます。宇多天皇です。宇多天皇は時康親王の子でも、一旦臣籍に下って源定省となりました。それが陽成天皇が退位した後、いろいろあつて父が即位することとなり、思いがけずその次に即位することとなりました。臣籍降下した人が天皇になるなど前代未聞のことですから、彼が即位しても誰も正統な天皇だとは思ってくれません。その宇多天皇がやった行動が、桓武天皇とまったく同じなのです。何をしたかと言うと、一番目に自分の子どもの敦仁

親王を元服させるとともに踐祚し、宇多の同母妹為子内親王を添臥とすることです。自分の妹ですから皇女であるとともに、叔母甥の関係での結婚です。これがどういう意味をもつかというと、皇女と結婚させることにより皇位継承権を付与する意味があるとともに、もう一つ重要な意味があります。実は敦仁親王（後の醍醐天皇）は、母方の血統において少し問題を抱えていました。母は藤原胤子で、その父は藤原高藤、母は宇治の郡司の娘なのです。天皇の祖母が郡司の娘では、自分以上に軽く見られかねません。それ克服しようとした試みが、この皇女との結婚だと考えます。しかも、為子内親王は自分の同母妹ですから后腹内親王で、皇女の中でも一番「血の尊貴性」を担う存在です。そうして醍醐天皇を権威化しようとしたのです。そして二番目として、宇多の同母妹の綏子内親王を陽成上皇に嫁しています。これは一見桓武とは逆の行為に見えます。桓武は聖武の皇統の血を自分の皇統に取り込むことで前代の皇統との関係を築こうとしたのですが、宇多のころは文徳・清和・陽成と続く方が直系皇統ですから、光孝・宇多は傍系でしかありません。そのため、本来ならば前代の皇統の皇女を自分の皇統に取り込むはずのところ、傍系であった彼らは自分の側の皇女を差し出すことによって前代の皇統との関係と取り結ぼうとしたのでしょう。しかも、差し出した皇

女は綏子内親王一人ではありません。宇多の娘の誨子内親王を陽成の子どもの元良親王と結婚させ、さらに、醍醐天皇は自分の娘である韶子内親王を陽成の子どもの源清蔭と結婚させています。光孝の子と宇多の子、そして醍醐の子と三代に渡って皇女を陽成上皇側に差し出しているのです。そうして何とか前代の皇統との関係を作ったと考えられます。これを見ても、宇多の皇統がいかに立場が弱かったかが窺われます。そして三番目として行ったのが、純粹に皇女ではないのですが、準一世王源順子を藤原忠平に降嫁させることです。これによって醍醐天皇を支える強力な後見を作りました。桓武と宇多に共通するのは、彼らが本来皇位につくはずではなかった存在だったことで、そのために皇位に即いても権威が極めて脆弱で、それを補うために皇女を使って自らの皇統の権威化と、前代の皇統との関係保持、後見となる藤原氏との関係の強化に努めたと考えられるのです。まさに皇女を政治の道具として行った政策です。こうやって天皇は、自分の皇統を権威化したり、強力な味方を作って皇統の安定化を図ったということです。いづれも、皇統が直系から傍系に交替した時、言い換えれば皇統の権威が危機に瀕した時にこういう手法が用いられたということです。

ちなみに、この後の皇女の入内と降嫁がどのようなになっ

ていくかを簡単に説明しておきます。醍醐天皇以降、皇女が入内する場合には、特徴的な傾向が現れます。それは、皇統が本来繋がるべき皇統でつながらなかったときに、その皇統の皇女が新しい皇統のほうに入内していくという傾向です。例えば、醍醐天皇の御代、皇太子となったのは保明親王です。ところが、保明は二十七歳のとき、即位する直前に亡くなってしまいました。その後、その子どもの慶頼王が皇太子となりますが、彼もほどなくして亡くなつてしまいます。結局、保明の流れは天皇位を継承できませんでした。それで保明親王の同母弟の寛明親王が朱雀天皇として即位し、そこに保明の娘である熙子女王が入内するのです。朱雀と熙子女王との間に皇子が生まれれば、それによって保明の血が継承されるからです。ところが、朱雀と熙子女王との間には皇女（昌子内親王）しか生まれませんでした。仕方がないので、天皇位は朱雀の同母弟の成明親王が村上天皇として即き、保明と朱雀の血を引き継ぐ昌子内親王は、その村上天皇御代の皇太子である憲平親王と結婚するのです。そうして、村上天皇の中に保明と朱雀の血を入れようとしたわけです。平安時代にはこの後にも、直系皇統が繋がらなくなる場合がいくつか出現します。例えば三条天皇や後一条天皇などです。でも、その場合でも、三条天皇皇女禎子内親王が後朱雀天皇に入内し後三条天皇

を生んだ例や、後一条天皇皇女の馨子内親王が後三条天皇に入内する例、同じく後一条天皇皇女章子内親王が後冷泉天皇に入内した例など、いずれも、途絶える側の皇統が皇女を通して新しい皇統に血を流入させるという論理が天皇家には存在したことが分かります。

一方、皇女の降嫁はどうであつたかというと、平安時代に入つて一番最初に皇女が降嫁した例は、嵯峨天皇皇女の源潔姫が藤原良房と結婚した例です。源潔姫は藤原明子を生み、明子は文徳天皇に入内して惟仁親王（後の清和天皇）を生みました。このように源潔姫は、嵯峨天皇の流れを汲む直系皇統を作るのに大きな役割を果たしました。天皇家と藤原摂関家との関係を非常に強固にしたのも、この潔姫です。また、降嫁した二例目になる宇多天皇の皇女源順子も藤原忠平のもとに降嫁し、忠平は醍醐天皇を支えていくこととなります。このように、天皇裁可の皇女の降嫁は、天皇家を支える摂関家との関係を緊密にする役割を果たすこととなります。

桓武天皇から後朱雀天皇のころまでの約二五〇年の間で結婚した皇女を通覧すると、その相手はほとんどが天皇か皇族です。その意味で継嗣令の規定は守られているわけです。いくつか降嫁した例がありますが、ここで大事なのは天皇裁可の結婚かどうかです。そうすると分かるのは、例

えば醍醐天皇の皇女が六人降嫁していますが、その中で天皇裁可の結婚は、相手が源清平と源清陰の二例だけです。いずれも源氏ですから準皇族と言つて良いでしょう。藤原師輔が三人の皇女と結婚しているのは、いずれも天皇裁可ではありません。このようにして見ると、一条天皇以前で、天皇裁可によつて臣下の藤原氏と結婚した皇女は、実質的に源潔姫と源順子だけです。天皇が皇女を他氏に娶らせるのは、有能な後見との紐帯を強めたいごく特殊な場合に限られ、しかも内親王ではなく臣籍降下させた源氏宮を与えるのがせいぜいなのです。そして、この特殊な場合とは、嵯峨や宇多の例で分かるように、皇統が交替し、一つに安定していない場合なのです。

五、物語への視界——おわりにかえて

このように見てくると、最初に提起した『源氏物語』桐壺巻の皇女の入内と降嫁はどのように考えられるのでしょうか。桐壺帝には后腹内親王の藤壺が入内し、桐壺帝の妹の大宮が左大臣に降嫁しています。后腹内親王の入内は歴史上でもあり得ますが、降嫁などあり得ないことは分かつてもらえたと思います。それを『源氏物語』は物語の舞台設定として語っているのです。そこから分かることは以下のとおりです。すなわち、桐壺帝に藤壺が入内しているこ

とは、歴史的に見て途絶える皇統の皇女が繋がる方に取り込まれる例にあたります。先帝と桐壺帝の關係はよく分かります。しかし、本来先帝の方で直系皇統が作られるはずがいま行かなかったために、その後腹皇女が桐壺帝へと入内してその血を皇統に残そうとしたのでしょう。しかも、物語本文を読むと桐壺帝の要請によってこの結婚が成立していますから、桐壺帝の即位する少し前に皇統の交替があったことが推測されます。そうすると桐壺は傍系である可能性が高い。傍系で権威が低いために、前皇統の皇女の血を流入させることによって権威化を果たそうとしたと考えられます。そしてもう一つ、同母妹の大宮が左大臣に降嫁していることも、その延長上に考えることができます。すなわち、桐壺帝は権威が低かったからこそ、后腹内親王を降嫁させて左大臣との紐帯と強めたということです。しかも后腹内親王を降嫁させていることからして、現実には考えられないくらい破格の扱いであることも分かります。桐壺巻の後半に語られる皇女の入内と降嫁は、皇統の危機に際して権威の回復と保持のために桓武や嵯峨や宇多が行った皇統形成の原理を髣髴させるのです。

今述べて来た事情は物語本文にきちんと書かれていることではありません。語れている現象を歴史を手がかりに検証することによって出てきた読み方です。これは他のこと

にも波及します。例えば、女三宮が柏木に降嫁することなど、実は歴史的にはほとんどあり得ないのです。なぜなら女三宮は女御腹内親王ですから。後になって女二宮が降嫁されますが、それは一条御息所腹——更衣腹だから可能だったのです。こうして見ると、『源氏物語』は歴史の論理や皇室の論理にかなり忠実に書かれていることが分かってもらえたと思います。今日は主に内親王の問題を取り上げましたが、皇女不婚は女王とて同じで、未摘花や朝顔、宇治大君や中の君の結婚の問題などにも波及するのですが、今日はここまでとさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

(拍手)